

「なぜ」に答える 子ども大学

太宰府でプレ開校 原爆や感染症専門家に学ぶ

子どもの好奇心や問題意識に、様々な分野の専門家が答える「子ども大学ださいふ・ふくおか」のプレ開校が17日、太宰府市の福岡女子短期大学であった。小学生の親子約90人が参加。原爆に関する紙芝居を見たり、化学実験をしたりと様々な分野を学んだ。



紙芝居「ちっちゃいこえ」を朗読するアーサー・ピナードさん。いずれも太宰府市

子ども大学は、2002年からドイツの大学で始まり、日本でも広がっている。持続可能な開発目標(SDGs)を基軸としたカリキュラムで、様々な分野の専門家から学校では学ばないことを教えてもらえる。福岡での子ども大学は、来春に開校する予定だが、今回はプレ開校として3人の講師が講義した。

米国出身で、詩人のアーサー・ピナードさんは広島を初めて訪れた際、原爆で生き残った人が原爆を「ピ



講演する長崎大学熱帯医学研究所の山本太郎教授

ちっちゃいこえ」を脚本。今回の講義で朗読した。広島的女性から聞いた話も紹介した。原爆が投下された後、血便が出るなど体調を崩した人たちが相次いだため、赤痢の流行だと医師が判断し、隔離が進んだという。後に放射能の影響だと判明したが、「当時はみな、うつると間違えて差別につながった」と指摘。新型コロナウイルス感染症にも触れ、「本当にうつるのか、うつらないのかよく考えて。考えるのは自由ですから」と語りかけた。

一方で体にいるたくさんの微生物や細菌まで殺し、薬剤耐性菌が広がったという。新型コロナウイルス感染症が拡大した際、「ウイルスとの戦い」という言葉が使われたことを振り返り、「守るべき相手は感染して重症化した人の命だが、倒すべき相手はいなかった」と話した。

太宰府市の小学5年、直野然さん(11)は、山本教授が体内には100兆個の微生物があると話したことに触れ、「体から100兆個をどうやって採取するのか」と質問した。「大便や皮膚などから採取する」と返答してもらったという。「学校で教えてもらわないことを知り、面白かった」と話した。(伊藤蘭莉)